

# 大陸（北支）

## 山西省の山岳戦線

### 警備の想い出

兵庫県 古家 弥知夫

昭和十九（一九四四）年ともなると、戦局の全般は日本軍にとって、正に退潮期に突入していたのである。昭和十八年の後半、欧州戦場のドイツ軍は、イタリア戦線では英米連合軍の上陸を許し、九月に入りまず同盟国のイタリアが連合国に対し降伏を宣言したのである。

東部戦線のソ連軍は、冬季に入るや俄然勢いを盛り返して大攻勢に転じ、ドイツ軍はジリジリと追いつめ

られていた。米英支の三国首脳はエジプトのカイロで会談し、太平洋戦争終了後の日本軍の処理について談合する余裕のあるところを見せていたのだった。

南方戦線においては、日本の海軍力も、航空戦力も圧倒的に連合軍に凌駕されて、南方諸島に配備されていた日本軍は、至る所で苦戦を強いられていた。

国内は国民総動員で、婦人の方々も敵上陸を想定、竹槍を持って、これに立ち向かうべく訓練等もされていた状況であった。

しかしそれでも支那派遣軍だけは、至る所で苦戦はしたものの、戦果を上げ、敗戦などということは夢にも思っておらず、まだまだ戦力はあるものと、国威を鼓舞していたのである。

私は、このような戦局になった昭和十九年十一月、現役兵として北支派遣軍第一四七四部隊要員として姫路の連隊に入隊する。出征兵士の入隊ともなれば、今までは地区を挙げて見送りの行列が続いたものだが、すでにその華やかさは消えて、隠密裡に入隊させ、どこへ行くのかさえ知らされない。出国の行動は絶対に秘密にされていたので、入隊はしたもの、いつどこを通過してどこへ行くのか、一切知らされていなかった。

入隊して一週間後のことだった。防寒用の被服が支給された翌日、初年兵は「全員支給された被服に着替え、直ちに営庭に集合せよ」と命令され、各中隊ごとに整列、そのまま姫路の駅まで行軍、まだ薄暗い夜明け前のころだった。そして貨車に載せられて港へ、まだ薄暗いのでこの港か分からない。船も貨物船のようだった。一番下の船底には馬を乗せ、自分たちは、その上に畳一枚の広さに二人というすし詰め状態、エンジンの音で眠れたものではない。やがて上陸したのが朝鮮の釜山であった。

ここからまた列車にて鮮満国境を通過、窓の外は真っ白い雪に覆われた山並みが見え、特に気温が零下三〇度とか、吐く息も白く、用便所さえ氷のツララである。凍りつく寒さの中、列車は山岳地帯を縫って山西省の潞城というところに到着する。

入隊前、山西省は山岳が多い、ところと聞いていたが、見渡す限り山また山ばかりである。しかもここは海拔二〇〇〇メートル以上という高原地帯である。寒さも厳しいようだ。私たちは列車から降りると、どのくらい歩いただろうか、部隊の駐屯する堡部隊所在地に到着、直ちに各中隊、各班ごとに配属となった。

自分は第五中隊第一班に配属され、いよいよ真の軍隊生活の第一歩を踏み出すこととなった。入隊前学校で多少の軍事教練を受けてはいたが、内務班のことは初めてである。でも戦場のことなので、ましてや急を要する戦闘要員なので、へまをすれば別だが、それほど厳しい教育はされなかった。即実戦に対応できるだけの短期一期検閲は約三カ月で終了した。軍は戦局が悪化するにより、このように初年兵教育を現地で行

い、警備の任と軍事教育を行うという一挙兩得の策をとったのである。

一期検閲を終了すれば一人前の兵隊である。直ちに、第一戦の警備のため、澤州というところの警備を前任隊と交替した。この地帯には蒋介石の正規軍ではなく八路軍が出没してくるのである。中国にも親日の新政府王精衛軍という部隊があつて、その部隊が各部落の防衛のため、部落ごとに自警団的な組織、即ち閻錫山部隊というのが守備についていた。この部隊は真の軍事訓練を受けていない集団のため、八路軍の襲撃があると、すぐ我々に応援を要請してくるのであつた。

ある日の夜明けごろだったと思う。ババーンという銃声で眼を覚ましたら、全員銃を持って宿舍前に整列、「只今、閻錫山部隊からの要請により、八路軍が襲撃してきたので、これを撃退すべく出動」との命令がなされた時はすでに遅く、敵は宿舍の近くまで接近していた。

各隊は四方八方に分散して彼我の戦闘は激しさを増

し、接近戦が展開され、約二時間ほどの激戦の末、敵は退却していったが、かなりの負傷者が出た。自分も左足下腿部貫通銃創で歩行困難となり、戦友の肩を借りて宿舍の中に寝かされたが出血多量、手当は衛生兵が止血をしてくれ、一応の処置をしてもらった。付近には野戦病院はなく、毎日衛生兵が傷口を治療してくれた。骨には異常がなかったので、約三週間ほどで傷口も治った。しかし零下三〇度近い寒さの高原地帯、傷口の痛さは一層身に沁みた。

この時の戦闘では、八路軍の死体は三人ほど、負傷は幾人かは分からない。我が軍では辛い死傷者は出なかったが、自分を含め五、六人の負傷者であつた。また閻錫山部隊でもかなりの損害があつた様子だった。

しかしこの戦闘で考えさせられたのだが、中国人同士で八路軍と閻錫山部隊が撃ち合っている姿は何とも言えない空しさを感じた。昔のわが国の戦国時代のころと同じであつた。中国では当時、省が違ふと、そこに住む住民感情というものが違ふので、古来から省の違った住民の争いというものが、しばしば行われてい

たと言われている。

貫通した傷口も完治し、歩くに支障がなくなったので、潞安城村において幹部候補生の教育を受けることになった。自分たちの部隊は独立混成部隊で古参兵のは、ほとんど東北地方の山形、秋田出身であった。寒さに強い地方の人が選抜されたのであろう。

山西省の山岳高原地帯の警備の任に当たっている我々部隊には食料はすべて軍から支給されており、その点は心配なかった。とくに新政府に協力している閻錫山部隊との協力警備であったので、日本商社の現地専任の米穀買取人が中支那方面から買い集めた米を日本軍に納入していた。このようなルートを経て食料は供給されていたということなどは後で教えられた。このように中国大陸戦線では、大作戦あるいは局部的な戦闘等においても苦戦を強いられたことはあっても、いずれも勝利してきたのであった。

三月初頭、捲土重来を期してインパール作戦が開始されたが、雨期を迎えた中の長征と、近代化された科

学兵器を装備する英印軍に阻止され、無惨な敗退となってしまった。補給の食料も救援の手も延べられないまま、幾多の兵士はビルマの山中で餓死していったのである。

また国内は食糧状態が悪化して、米穀の配給も思うように届かず、馬糧にしていた高粱や豆粕といったようなものが国民食として配給される事態となっていた。

ガソリンの入手は困難を極め、松の樹脂から採取した松根油や木炭ガスを燃料の代用に当てている始末であった。都会はB29の爆撃で焦土と化してしまったのである。

このような戦況下でも、北支派遣独立歩兵第十四旅団長・内田稜少将は「我々は決して負けてはおられない、最後の一兵に至るまで戦い抜こう」と決意を各隊に通達、士気を鼓舞し、意気軒昂であった。しかし南方戦線では、海軍、空軍ともに米軍が勝り、南方の島々は次々と玉砕につぐ玉砕で、致すすべもなく米英連合軍に対し、昭和二十年八月十五日、遂に無条件降

伏となったのでした。

午後の零時ころだったと思う。各隊から命令受領者集合の伝達があり、何事だろうと、自分も部隊本部に駆けつけていたら、何と敗戦の知らせである。ただ啞然とするばかりであった。まさかと思ったのが現実となってしまったのだ。隊へ帰ってこのことを報告した時は、誰一人として声もなく、しばらくの間茫然としていたが、次にすすり泣く声があちらこちらに出てきて、ある者は、ぼろぼろと涙を流して泣き狂う姿さえ見えて来た状態であった。我々はこの後どうなるんだろう、みんなそんな不安にかられていた。

翌々日、部隊は踏安附城村に集結し、ここで一切の武器を中国正規軍の前に出し、武装解除となったのである。私は実際の軍隊生活は十カ月、そして抑留生活十カ月、昭和二十一年六月、鉄路で上海まで、そして佐世保に上陸、復員となったのである。

故国日本の姿は、変わらないのは山河だけで、都会という都会は瓦礫の山と化し、出征当時の面影はどこ

にも残っていなかった。戦争というものは大自然も破壊し、幾多の人命をも犠牲にするのである。自分はあの戦いで、足下の銃創ぐらいいで再び故郷の土を踏むことができたが、帰ることのでき得なかった戦友のことを想うと、戦争という事態は永久に、我々の子孫には味わわせたくはないものと、祈るのである。

## 北支、河南作戦を生き抜き

### 今の平和に感謝

山形県 上田 徳二郎

歓呼の声の熱気に囲まれ、無我夢中の中、村長さんや、その他有力者の激励、祝辞に応え「皇国の為に身を捧げて来ます」と覚悟の程を披瀝し、後顧の憂いもなく住み慣れた故郷に別れを告げた、あの日、あの時の感激が今でも脳裏に焼き付いています。

私は父母、兄、姉三人の末弟として生を受けたためか、父と兄が農業の傍ら炭焼きを生業としていたの